繪本豐臣勲功記

三編

六

へ遠13
2209
26

特
門へ遠13
帙 2209
巻 26

繪本豐臣勲功記三編六之巻

同録
浅井家絶好謀挾二殿信長一
屬信長退去
木下藤吉郎敦賀境殿紅
屬亂陣歸京

昌平坂學問所

繪本豊臣勲功記二編卷之六

江戸　八功舎　徳水刪補

淺井家絶好謀挾殺信長屬信長退去

大河を陸小成さんとせばバ必ず崩れあり。寡ハ江別ハ若狭城を淺井備前守長政ハ織田信長と縁者なれども去年殺辛の辨論より。心中怨をとけやらぬ。両家の間親しからず。漸く不快とかりなるゞ這遺信長上洛ありて。不意ハ越前へ進發せしゝ文下野守久政大ハ怒り。子息備前守長政をもとめ一族臣家を呼集め。声烈まして詈けるやう。信長先年の義約ハそむき遠方へ一應の報謝もなく。朝倉退治ハ出馬せし事。言語ハ絶せし表裏なり。殊ハ耳分や霞雨翻雲やうて淺井を攻ん事。猶ハ思く

明ありし先だての論を人々に制し。後の時は制せらる。早く絶好の断云と達朝倉義景を相扶けて父祖の契約を守るべしと怒氣凛々と謂発まで。諸士ら的信長の不信を憤る余御當躍と同じくるに。遠藤喜右衛門進み出て時の様子ども今更後悔詮なるべし。先年小谷の佐和山に於て信長と殿様と重せし時御父子兼引まもさだめ。此朝に及びて絶交なんど決して御左用の都殊に信長今はもや。天下の權を掌り。畿内五箇國を洗尾張こと別懇別を以。若狭こと侯の國を攻脅け。勢威既に強大にして。向ふに敵なくば當家朝倉と合体をも爭で偶ひ兄弟と遠て御縁者なり。只管織田家と親ん縁當家繁昌の基ふい朝倉家と拾別の誓約こまあり共。今度対軍は信長の私ふなる而ふあらず。天下に為當ふ不義を戒しむ。ひろく諸將軍上洛ありて三年ふ及ぶとも。朝倉発動せざる縁は意外の罪過ふひとぞや。信長台命に背りて義景の罪過を糺さんとは越前ふ出馬せらるる事。十分に道理也。然る當家絶好ありて朝倉ふ対の撮せらまば。天下に對して不忠なり。當家の滅亡遠るまじ。早く思起を休させらま。大將分の人として。織田の陣所へ御訪問あらば。信長まそく歓びて。當家を重んじ給べし。但朝倉へ義理違ずとおしゆされひらくべ。信長義景和睦の義を御料理ありて然るべしと。親を盡し七諫めまば。備前ちは是理ふ賢し。同心の体ありしうども父の久敬こまを周ひ。苟も武士の誓約ふ金鉄もみか固しとせず。先代朝倉の扶助ふよりて。我家全き縁を得らる。そまを今更義ふ背き。朝倉を

事ゝ事やハあると怒ゝて罵るべ。意氣定まらぬ事ハ。いづれも是
ハ雷同し。頻ハ織田攻と勧るハ。方便ハ善改も力なく。父の命ハ
相從ひ。朝倉家と謀り合せ。前後を攻く挾殺んと評議まハ
一決なし。昂時ハ浅井福壽菴木村喜内助を使として義景の陣へ
當遣し。先代契約ありし如く。一身同心とぞき旨且ハ両家の勢を
もつて。信長を挾て殺ずき計策を。精しく稟議しゝ義景孫ハ
表悦なし。使節を厚く饗應して。折書ハと相齎らせ再び御使
右と待稟と。紙して使者と返しゝ。浅井父子ハ號を起。然らば
軍の準備をせんとて。熊谷忠藤ハ河内を使として。信長ハ
賜らもし。折書をもつて返さまつて。遠晒信長陣を移して。金
濃ハ支せし。浅井家よりの使者来り。事ハ剛杖を頼く演舞し。

起鼓交を返しけるに。這風説を聞と。陣中倉卒ハ騒起。
信長ハも怪をなひ。諸士を集め評定あるハ。木下藤吉郎稟
まらく。まらく。河退陣せらるべし。浅井父子の性質なるや。猶豫の僻
あるハ。東西事。総く遠ざまで。無ども居家の遠藤赤尾等
智謀ハ軍ひ。挾殿の事を計るべし。自軍大軍あるが如く。退路別て
難危ハ。まづ諸士達を早く退せ。君ハ小勢をつれ奥へ玉ひ。雨道を
退玉ふべし。備水道の中軍へ君の御旗御馬標をのもの如く建さ
せ玉へ。浅井ハ同當て路を遮へ。ふたゝび多くもあらぬ集り武者。蹴散ら
して通らんこと。難きこと事なるまじと。君居の氣を懲まて機会なり。
候ハ名士馳返り。義景出馬と相見つゝこと方計の勢を率ひ。帰烟
野外ハ充満し。府中をまで出張せりと。注伸を聞て列座の個ゝ。

驚愕しくるゝと秀吉若び義景出張しらん小い行時も修孫右
るゝくゝまで早く御退きしなさべし。秀吉此小諸止め。追てまゝる朝
倉勢と。嚴しく拒障事さん小。おどろ一日一夜ゞ小どハ奏らまざる事
あるべ紀ゝ際小ハゝ近江路へ入らせ玉ふべくハ早うち起せさるゝれと
勸め申ゝ小伝長紛め。諸士一同小ハ木下ゞ武畧を感じて大小称賞し。
四月廿八日申酉刻小到る頃。大將信長金ヶ崎を退さるゝ。これハ木
下ゞ說所如く。兩道本道二隊小ゝ分る諸士ハ森こ
左衛門佐々内藏助侯君と守護して山越小。若狹の國へ當ひ玉へ
柴田勝家坂井政尚。池田信輝蜂谷頼隆侯。二手余騎小て本道を
信長の押せゝる殿小。氏の敗うゝ旗當憚。長柄の槍など を連
備々ゝて紀退く。然ゝど小淺井長政ハ軍慮小賢しき大將なれば。

我隊をうの小勢小て。信長の大軍を轟ゞさしと頼て石山へ使者を遣。
加勢を怙る申されゝまバ。顯如上人も淺井と小所播の親ゝ有る故
等閑小ハ為ゝ。江刈小信持ゝる大房を衆へ小辞あるべきバ。
浪人、御士を弘集め。淺井小加勢せしゝ。長政大小歎び驚を。一
方余人の勢をもて。織田退路の殺不を断截ゞ僅や来ると待構
う。時量さへ紀小織田ハ旗の方。飜をとして入へるまバ。ゝや信長
御参ゝと諸所の山陰谷間より。一同小發起。前路を遮り設んと。
柴田勝家正魁小進を来りつ渠侯を見ていさゝ浪人御士侯ハ
集勢と覺へう。ゝで蹴散して道を開ん。各軍づけと一喝叫び。猛
をうち振突發し。前後左右を烈火の像く。搦起く〳〵馳廻まバ石山
門徒の一揆輩柴田一個小突起らま。散乱ゝる手和へ淺井の軍会

間道を
列行て
織田殿
金ケ嵜を
退陣す

殿て出展猶て戰へば織田方より也坂井父子池田蜂谷依田も搖らぎ。次授々きべ。淺井の先陣古屋を見く。其織田方ハ摠崩と覺へくるぞ。弓流をかなて弊崩せと雨の如く放ちかるめへ。こ是ゲ當小撃ちうの。多くとゆへども名小負織田武者。幸ともなさで弦彼て一度小親と通しなを。淺井の軍兵俄よくく見まべ。風社敗うつる旗のをふて信長ら更小ふんえ玉ナそ。備ハ大將酒を勢く。退うまてるゆ社みるべしこを為ス軍小胥ハらんより。ナや退べしと指揮しつ。人數を纏めて引ス揭ゲまべ。織田勢もまて是を追ナぞ。靜ふうちて當夜ふうちふ坂本まで退百ス。備信長ハ三千餘人兩道を經くありるゲ出今敵軍一個もなく。敵ス美中ともおがしき須小。若列依垣へ見せ玉ひ依垣まで二里余あり。粟屋越中ナを指ませ多へべ。種く餐應しそまつ。敵く炬松を

あまて延させ。越川の関を越させまゆらせ。江列朽木谷ふうらゆられ。朽木江の門ナを指ませ多ま。真實小こまを迎へまゆらせ終夜よく警衛ス。同月毎日事實ナく。京都へ帰ス出ひう

木下藤吉郎戰賀境殿廻屬凱陣帰京

蠡海集小曰詞ハ。膳を陰こし。背を陽とと是とりて推ス。退陣の機ハ背小ハ。是を退の機ハ後小ス。背陽とりて膳陰小當る。刻て秀吉此小天助の智を加ふ。敵百万小して退ふとゆへども弟でハ是小膳ことを得んや。延ゆどに木下藤吉郎秀吉ハ三千余騎の兵士を從へ。戰賀の津小陣止り。破邪ナしてる金ケ崎の城讃小悔しく旗當幟を標列。大軍ス凱守し態をんせ。無た右の山々樹木の枝小も色々の紙旗を結着ゆど。昭嚴遠丘のくぐ小五人三人の鉄幸を今

金ケ崎の
殿駐ふ木下
奇兵を謀く
朝倉勢を
駆す

置。数十町がその隙に。炬火燎火焼續ける。備まさこ二千余人の兵士こと中央左右とこ隊に分れし。一隊は千騎か金ヶ濱より。十町をうも前路に進みて。朝倉勢の推進来る。道條をたうて。堀伏させ。大将秀吉も千五百騎。金ヶ濱の麓にそなへく。雑馬繋数十本。隙際あらせぞ連列ねいるに大勢の容にんせ。残る五百の軍兵は勝出せし。勇士なれば。彼伏勢の所より。又十町程間隔をへさて。樹林の茂中に伏置こう。是は大事の場なまべとて。竹中重治を大将とし。おまに加たる英雄は藤次賀に。同又十郎。堀尾茂助。稲田大炊助。中村孫市郎。山新七。同小助。昔江半之丞。川口久助。日比六左衛門。加藤虎之助。福島市松。庁桐助作などの面々。時刻おそしと候陪ども。切とは知らぬ。朝倉義系。金ヶ濱を救ぞ。とまづ一族の勢

武部左衛門景鏡に。五千余騎の兵士を授る。廿七日の早天に。一ふの合とうち起せ。府中をく来に。時。金ヶ濱の城をみる中勢。浦系頃ゲ。敵城を落く。一系合へ趣んとする。行合う。景鏡大に怒る。始末を聞て力も技。怒が義景と一隊に。捷殿に。なさでや。と系頃景鏡。引戻る。兵に一系合へ退返を。怒る。勢食左衛門督義景は。敗る事とおもひもよらぬこと。万余騎を引率し。廿八日の暁に。一系合を進発して。推進来る通路をひく。猛馬を乗。武は窪地先ふしと。謂ひとおもへば。敵は。疑より。或は落城せしと。告歌。投入ると。注伸を。待さへ。系頃景鏡。引返しる。際もあらせぞ。又も猛馬強者て。浅井の軍勢。ゑや。既に。当國近く進とうるを。信長おを。驚きて。退去ゲしる。疑ぞ。疑ぞ。退殿しるべ。必定。御猶利

（今若狭の民は世人多くまへ名とよまずおなをハ若狭にて此民を古来公名羽と名づけよしんさんをもつへなづ俗耳ゆえにひてまへもとせり）

たるべしと注伸を咋く義景喜悦し。然もあるべき事なりと。然らば先陣を定むべしとて朝倉式部亟景鏡同中務少輔宗順小谷波九郎兵衛尉景鏡自ハ二万餘騎を引率し後陣をうつて急げとぞ。先陣既義景景鏡自ハ二万餘騎を引率し後陣をうつて急げとぞ。先陣既敵賀の地ハ入り。斥候を走て窺しむるハ日ハ暮て黒白も紛ねど。炬火燎火を焚とぞ。織田勢をぐめハ少もせぞ。金ヶ崎の城中城外左右の山谷ハ陣を張旗當幟まで騒しく。勢へひと注伸せしに。累恒倫大ハ敵を。暮び十余人を使ひ得と密を見決むるに。組の若ハ遠ざければ。備を信長今もいく。退去せざると覚へつる。今宵ハ遠石ハ陣を構ハ天早朝より推進て。用城の砦を雪ぐんとて。金ヶ崎より十町ばかり。遠所の方ハ野陣とする。義景も遠注伸り

軍ハ明日とて宜くぐめと。野陣を張く休息せり。先陣後陣の其中間十四五町ハ過ざしい實ハ木下ヶ藤ハし不。すを遠きぬ事ぞ是。神ハ通ぜし秀吉なんぬ。朝倉勢ハ二万五千。いとく軍る明日ハ事よく心を定めて野陣なし。甲斐のなどい急ぐ。陣く厳しく守りつまども。夜半を過る刻頃ハ。將卒とも小倦来りて。眠氣落をも強ハことなり。今朝より千有余里ハ おひぐ山坂の難石ハ草叢ハ。丑満をぐる頃ハ。善悪も知ぐぞ熟睡しけり。木下部て形あらんと不思議の明察を得らしく。自方の燎篝も甲斐の程を。燭ハ焚せぐるが。夜深るまハ小火光も。消へ番兵も稍怠色ハて。陣勢幽なるハより。朝倉方ハも大意とて。備こそ敬をいとく明日。率退くとかがへさま。然らば西く社陣拂ハ。心急ぎて歌殿をと小生

ゑん軍ハよもあらじと心敬して休息し給ふ。這時秀吉敬陣をく。自分と蔓延と兩徹し。もゝ宛竟の時ありとて自燒一千五百余騎を。こ隙小率部正面左右。多流あまる把持せ。麓の陣をもづゝ小赤出。敬陣をく多る儘小暗号の烽をあゞるやいなや。朝倉燒の野陣せし。左右小伏る一千余人そまと一時小甲斐の間より。狭辛小指向し搖置る樹木の枝の炬火を。一時小燃し起ゝれば。宛も敵軍の大軍勢。發起る容小ゑんて。漫々なとのふべふなし。秀吉這火小威燒を添く。喊とつゝ多流を放蒐鳴呼ぐ攻起まば。朝倉燒の搖摺ゝること。鉢鬼ゞ虎穴小院ゝる像く。浪き目擦て起出まば。四方ハ是より敵ハ白。進ゝ八幾万あることゝや。多流の喜喊の声。天地も崩ゝ計り織田の軍勢十万余と頑て怖氣のつひゝゝまば。誰ゝハもゝ小弦向ふて防ゞんとのふ軍もなく。北陸寄て殿ゝまゝる。ゝ。景鏡京極黒坂等波踏止つゝ逃亂ゝ。自分の兵士を敬起。家殿ハ僅の小勢なるゞ。暇を爾ゝく同士撃を殺と呼ゝ。指揮ゝまゝども。一万五千の軍兵巣ゞ。景起ゝる事なれば。いゝふ制ゝまゝども。聞容ゝを。後ハし親ゝ跳越我ゝ先ゝと逓ゝ自分小武勇の景頓京鏡も。心ゝ侵小操得ゝを。繰小退き脱とゝんまば。後陣の方も恩劇家殿や投しと見ゝゝゝ小。忽地燒ゝの火の光多流の喜喊の声。ゝ小把ゝ如く聞ゝまば。先陣の諸將ゝ。ゝ驚ゝ。斬ハ一大事ゞ出来まゝ。敬ゝゝゝんがあゝべゝゝゝゝ。奮ゝ續け。と指揮しゝ。一騎弦小走出ゝ。逃廟ゝひゝる狭辛巣。大將も共小逃ゝ。ことゝゝと思過ゝ。今ハゝゝ。命の外小惜きものゝ。共逓ゝこゝ肝要なゝと。馬武器ゝゝゝ。ゝ。賛ゝ小ゝゝて逃ゝゝゝ。木下秀吉ゝゝゝ逃ゝ

ぞ。朝倉が陣ハ捨てし弓捨鳥流れ去り離れ去りぬ。ハくハ百さぞ。
原の陣所へ退退しぬ。備まさ義家の陣中ハ。明日こそ淺井と軍と
合せぞと一揆ハ織田勢と退殿ハして悩さだめと心を敢て更ハ小心
の体もなく。甲冑より休息なしなる所へ行中半に陽重治が五百の猛
勇士を引率し義家が陣をく潛進。木下が隊の暗号をまち。時
稍移りて亟ハ入り。銀漢の色は傾くこと。合圍の燈火空高く再々
ぞ沖ると齋しく。攻起る声のもしどもしが。暗号の時刻ぞ来る。
然ども些時遅きがよしとて。強辛ハ指揮してこなさも同じく。山々谷々の
樹木の梢ハ。結若ひなる炬火を一度ハ燈と燒起るまぞ。四五町が間を
照し連ねて其勢幾万ある緯少も。眼も曠むばかりなり。陣中熟く
咽若し所へ喊をつくりて責進るれば。將卒ともハ猛獗呂り膽ハ膽甲

若るもあり。頭ハ眩冑を當るもあり。天地地頭ハ散乱そる。偖ぞ
と蟠尾蜂次賀。高山稲田の勇士達右ハ掛起左ハ離伏せ。微塵ハ
なせと飛散らせば。暫時ハ死骸山をぞ塁む。魚住山陽なんどの猛將
勇士あり。駆ぐる。思設ぬ事なれば。漸く甲冑うち堅め。大將義家
の本陣へ喝く。飛来て見いなハさる。自分のうちハ。誅殺人の出来し
なるべし。若ハ小程避至ひとなひもならぬ目前へ。数万は大軍山城
ハ。推よせ来る。伏なれば。備ハ織田勢両道より。自軍の横隙と駆ハ
なんん。呼いふして陣ぐんぞと陣中門の潜ぐ。千鑑万倒ぞ
なる。義景素より事ハ除とて。稜なぬ性質なれば。甲冑さへも被課
せぞ素肌のまゝにて馬ハ躍り從者も四五人漸々率俱し。陣背ハ
ぞと通ぞ出。語と拙とて奏走せ。うバ大將卒ハ。まさぬと見て備こそ

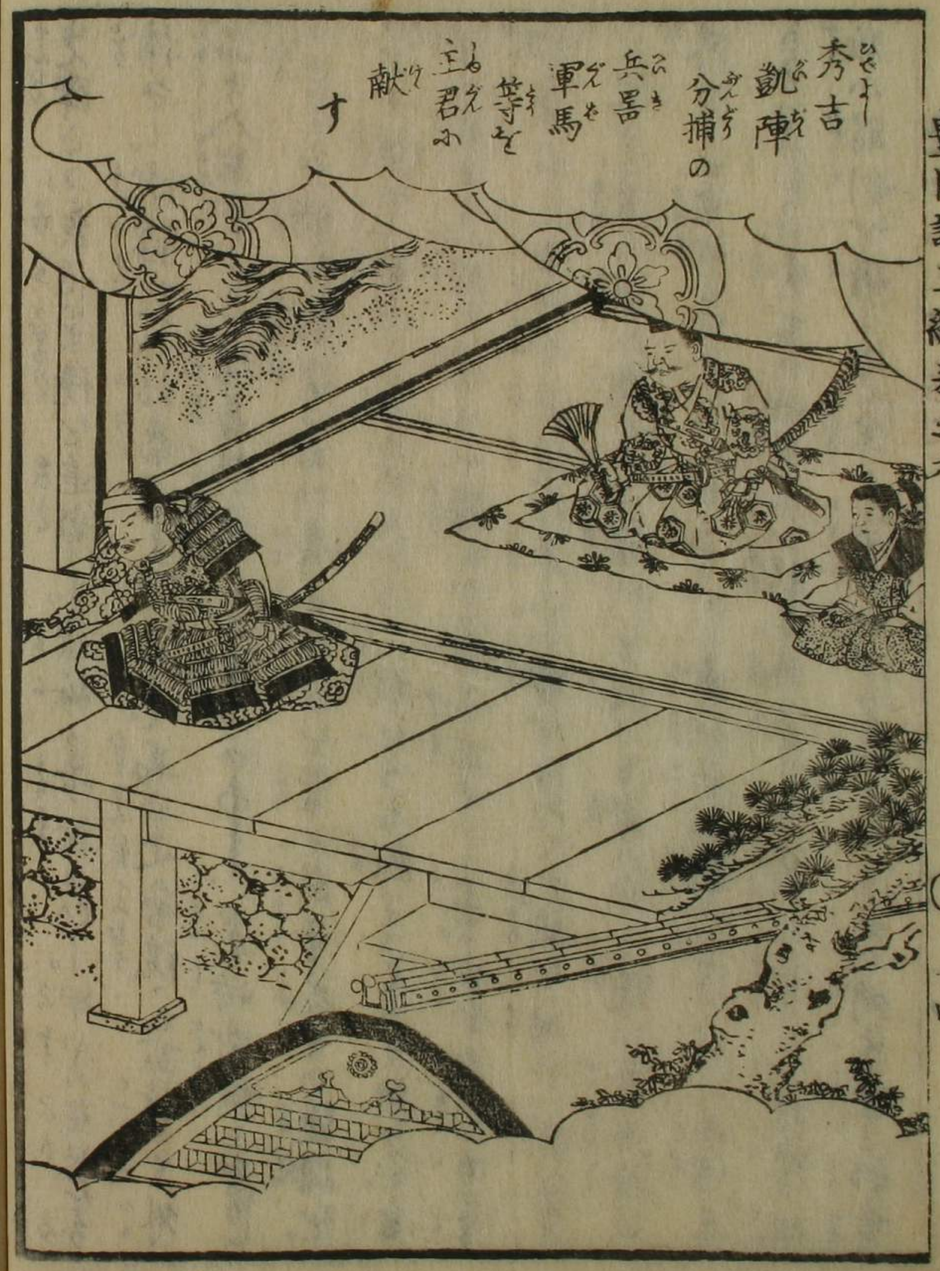
木下の殿駈ふ
加藤福島
斤桐初戰ふ

殿を取ふならめと色矢うて馳廻る。竹中が隊の五百余騎いとく暮る事
猶小勢。豊横に出て横と吹起掛起。敵又羅刹鬼も形やあらんとさんる
中小も童子武者。加藤虎之助福島市松行綱助作のこと今年今日
竹中小後を。軍見物のさわ出たるが。朝倉勢の敵能とるとおりこれき
緯小思儀。一攻して得首せんとこ陰に隠れ十二騎。外も應せぬ武者
斗びなし。連行会士と云七騎。実蔵しる行狀は麗く然こそ人へ
よろれ。然バ竹中重治は恩ひの侵小本陣を繰ゲ出。先陣の勢行退
退をと。そもと見るより自軍小指揮なし。敵果十名勝ちうへる。
連小退陣せとて。退退しく来る敵勢こ。落と違へく遠果く。金ケ崎
へそ引取る。而へ京極景綱能居得見兵部いろ小大将のう義ふ。
敵も自気もあるされば。新まて更小惣然さしが。新兵果ゝと自気の死

戦。あるひハ棄る甲冑会器を元集めさせ戦場の砲撃をとゞろ小藏し。
遂小本城へ退しるる。備まる本小藤吉郎ハ竹中が勢と待小程なく。
半蔵重治帰来。京殿の始終を門譚諸士の奉功そまくく小。演
連もうるまに秀吉大小歓悦ゆ。各へ感賞の鑑を賜へなどとるうもち小。
夜も明られば先退ぞうんと。二千余人隊伍正しく。敵賀境と漢くとし
て退挿ふ凱陣の威風へ雄ろう実ろう。こ四里だろうも来る
かど小浅井長の撥の一撥軍。遠野形林ろう撃て出。本下が帰路を遮ふ
とゝ云へども朝倉勢の二万五千。そもさへ東西ともなきゞし。本下勢行こ千
余人唯一鉄小砲散らして。落次小もとしも障遮なく。坂本(比叡山の城)
帰しるけり。遠晩大将信長ハ京都小立して自軍の名行帰来ると
待ろ多ふ小柴田池田の二万余人へ。お通を推て来ゝ浅井の勢小出合

しうども是を破りて羅城門へ帰陣し。信長の御座所に参上して軍法次第を言上し奉るに、浅井小谷城せし一揆輩多くは石山の門徒なるよし。信長所々へ申されしは、心中左右ふ本願寺を如来なるべ様々に天下の愛とおもうぬべし。時節も来らばとおがされうず。茲小殿様にて殘置れし。藤吉郎ゲこと千金綺のいまだ帰来らざるを只管心ふ発路せらるる。遠ゲ安居を知らんがため。坂井弟四郎西将ふ千餘騎を當副られ中途へ迎へふ出さるるゲ。江州尾奥川ふて本ゲ帰路ふ出合るるゲ。利家政尚帰陣を祝し。因信長の意を演ずる。秀吉重治落涙をるまで君の恩志を感佩し。坂井弟四ふうち連ざち京都ふ入る。即便ふ信長の御前ふ参上しられば君ふ宛亡人の蘇生るをうふおがさま軍法次第を問せらるふ。秀吉謨弥云上をらく朝倉方の

先陣ふる。糸頃景境を追撃し。渠俄ゲ歩捨ひし。甲冑を脱ぎ捨ひ。捕ゲ。即鑓所ふ打参つるまりぬと。馬を走る流ふ二百疑ち外品々入賢せしゲ。信長愕然ふて感心のあまり。霎時御朝もなりし思ふを膝を擂進るゐ秀吉の手を掌て斬量大事の遅路を。こ千弟の小勢ふして。こ方五千の大歓をうち敗るるのをみらず。自方の兵士を一個も傷めず。賜ふ多くの分取せし事。古今未曾有の功とのべし。古往今来進む軍ふ小勢をもつて大歓を破りし例ふ為とのべども退く軍ふ斬をうる。勝利を得る者ハなし。強ふ藤吉郎ゲ外ハまうと来世とのべともよもあるまじ。希代不思議の名士なるゲと感嘆志きりなりしゲ。秀吉の面目ふ剣を再弾ゲして幕ひ言さく。這遺の敵駆ふ勝利を得しこと全く小殿ゲ功ならず。是ぞ主君の御運と称賛


秀吉
凱陣
分捕の
兵器
軍馬
等を
主君ゟ
献す

家の滅ぶべき。時節に機会よく出合へ。藤吉郎が造化そふと云ふ。奉ぜしめどに織田殿まさしく賴母しく思ひしめ。再び軍の進退を問せらるゝに隨ふて。是非分明に說連べ。郎帰國の後に要須のりとて若列の法侍の人質を提諸城へ自軍の名士を籠置帰国を迷ふ勧めまゐらせ。信長實ふもと同じくなまじ。然らば若狹の諸侍士より人質を請取べしとて。丹羽五郎左衛門尉智十兵衛を遣されて佐畑の要屋を中島熊川の松宮玄蕃允。宮松の遺見綾河内名郷の熊谷大膳を外武藤上野介。寺井源左衛門佐惣悪人質を出さるゝ。丹羽昭智左衛門尉石奥へ。都所に帰て云ふ様。伝長さてなるべ。信長の使者を定め置たべしとて。まづ宇佐山滿安郡八瀬の山をいふ森三左衛尉可成。永原の城野洲郡也ゆ佐久間右衛尉

信盛長光寺武佐名也の城ゆ柴田権六郎勝家。安土山ゆ中川左馬亟同八郎左衛門を守置る。備前に長濱に城を築て木下藤吉郎將軍家より領ぜしゝ。這遺新ゆ入府して。城を堅固ゆ固め。柴地の民を撫育なしつゝ。淺井を警守見はまつる。京都への通路なべ。自由なるしむべき命せゆより。秀吉君恩を謝しそまつる。迷ゆ長濱へ羅城を造堅固ゆ森佐久間中川等の諸將もものく。こゝ濃州くゝ純粉り。徳く淺井久政又ゆ謀りし事ども成ざりなまべ。憾念ゆ思ふとゆへども。今更悔とも詮なれば再び計義を定めるゲ。伝長の帰國を殺だと。甚分新しく西之日。路次ゆ埋伏なとゆへども。法法嘗てなりしゝ長政忠度思案なり。信長京都ゆ這留まることを。是壁の所なを。朝倉方と中

合。不意ハ濃州岐阜ヘ推進。城を一時ハ攻陥し。こゝ勢を抜ぬるぞ。しかも地ハ上落しゝ。ゆゑ信長いろハ猛くこゝも拒抗ハ方術なるべしと。諸将を決し。就第へ能術を弛く加獲らひろゑハ義業これハ同意せざれバ長政大ハ困ることゝへども。御作をくぞ体ハ。備信長ハ本ヤ。勧めの如く行政を定め。五月十九日ハ京都を出馬し。路次をもるく去せるゆひ濃州當て帰らせり。

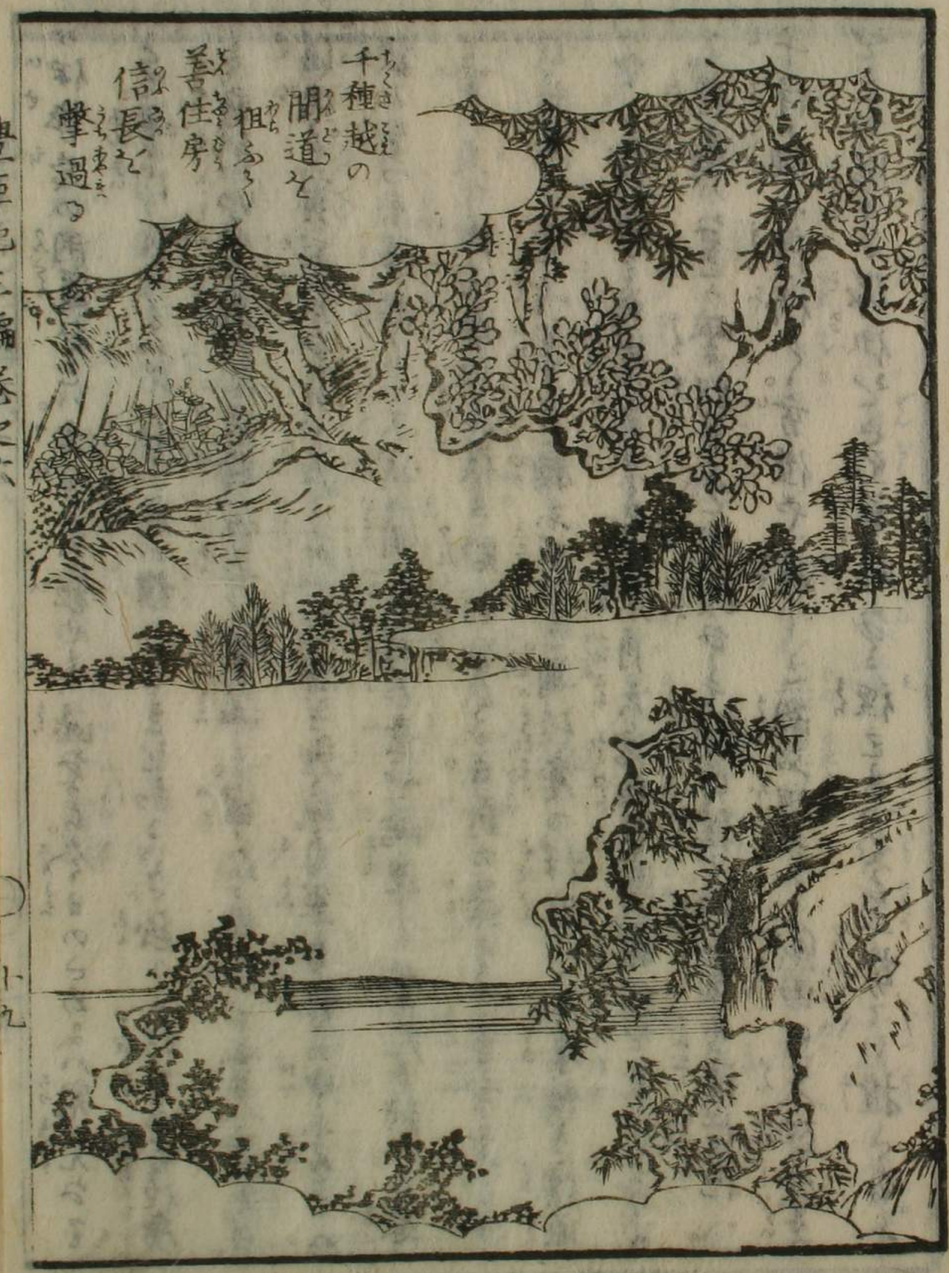
若信房義擁兼領謀信長 属岐阜帰城

蒙草その根を遺を時ハ再び稲田社害とあり。茲ハ先年織田信長ハ恨まるゝ。ハ角入道兼領父子ハ石勢の城ハ隠住ハ。ふもみして北南を百迄さでやと謀をとも。信長の威勢日ハ随ひ月ハ應じて廣大なるゆへ。勿々敵対なるべしと。時節を見合せ。

遠遣。浅井家信長と好を絶断。帰路ハ待伏設んと謀る事を。所々しゝ。ゆゑ機会なるべ。遠方ハ。一軍して試ゞやとおもひ。依て本家恩顧の武士軍を遠山形林より集め。鯰江の城愛智郡在ハ対滋賀市原寺の人民を催し集めて。信長の帰路を殿んと計りける。茲ハ勢別翻明彩杉若圓通寺ハ信長義信房敬酒とハ者あり。心能ゆを乗勇ハして武勇を好むそが中ハも。殊ハ島流を熟練せしゝ。こゝ及兼領ハ義のさられ野例ハの。この原ヘ出張し。信長の来るを待うけ。然れどハ信長ハを江路ハ入ても切急ゲを玉えぞ。静ハ馬をうこせらるゝハ野例の河原ハ敵あり。と魁隊の陣より注伸しられバ。信長冷笑ひ多ひ。定めて野武士の一撲なるべし。何量の事ろなさん。跪蒙らして通るべ。と指揮せらるゝハ依て蒙内。板井。池田の勇将達正魁ハ進んで駆寄を懇ゆし。六角勢の心中

（面も振らで斬て投割破微塵ふ粉起るまゝ。敵兵大勢ありとゆへども
牟でうこ是ふ及ぶべ死。四方八面ふ連敵さう。六角兼頼大ふ怒り。自勢を
號めて擊て蒐ると。織田家ふ名を得し勇士達ハ一騎當千のう
ちまゝ怖氣のつひうる江列勢と驚く。ものしく斬出ものとめふ一騎
当千兵遣る軍もあらばこそ。恪さで駆立しるふ兼頼心を猛しと
ゆへども向ふ力のおうくまゝ。鬆江の城へ逃入さう。織田殿ハ猛く軍を好
まゝで勢と纏めて遠と囲き。伊勢路ふ振らんと急ぐせこ多ふ威風凛ふ
凛ゝとして。四方も慄くぞうなまゝ。彼扶若の若侍房ゞ神ふ通ぜし鬼
御の。決晴あざとも定まらぐで。厳うへ自軍ふ崩るゝに。退起らまゝ奇僑
ゆえ。中間遠ふ延こまゝ。鬱斷としつも箭を撥去。大將の体とよくくえ
る時。信長莞ふとうち笑ひ。諸士の勇戰を賞嘆せられ。淺井。六角

ひとふふ。雲霞と謀るとも。強弱ハ蟷螂ゞ龍車をんぬとふげ
玄歌と蜉蝣の像く。瞬せ玉ふ眼光凡人ゆふぞ思へこゝゝ。熱る
ふ池田依云小と。渠們を棄ゝ。取ふ是らざる。凡民軍の一揆ゆて。
怖るべ死ふハあらねども。依々木ハ累代當國ふ主くよく。石性と列名
さう。遠遣の形る改金も。一朝一夕の事ふハあらじ。此先とも又擊て蹴
妨ゆさんも量ゞこし。唯所要心ゆくんハあらぞ。蒲生賢秀と案内者と
して。囲道をうとせるゆへと棄ゝ。信長もつとも二同じ多ひ直地
ふ日野蒲生へ投玉ハ。賢秀父子出迎へ種ゝ餐應ゆしまゆらせ慇懃して
后ゝ囲道ゆる。千種越と導ふ。弁も此ふ接就といるこゝゝ。日野の
里ゝうゆる羽田津。畑山と経て。蜂別ゆる。千種の里ゝ出る路ゆう山嶺し
ふ。て。谷深く流れゝ通せ。路ゆまゝ。濛濛ゆ。て砂漠ゝうこゝ蒲生


千種越の
間道を
狙ふて
善住房
信長を
撃過る

が伊勢路の用道なるべし。明日よりは秘せし通ぶら。今日のさめるは寛容なる
とて。棄門しそまいぼしなり。然ば雑人どもは
る野列の原の戰ひは大將信長と聲滿し。寧ろぬるさおり（ども）その
後做なべ紀計なれば左は右心と確きころが。自軍多勢の中ふるてへ。
歌よをづく緯恨じ只我一個見親不意を流視し。撃んかと姿
と寡して織田勢の右後より駆刷ひろが。日野の蒲生が導命ふて。千
種藤ようると。是こそ願ふ和なる。順位房の杉谷より。豊後き溪通
うう。水は根ふれ岩角まる。日来月去踏熟とまば。鞍不を前ようげよ
る。既當バみどう鞍鞍ふんと。雀躍ふて鈍び號。秘義の多統根抱へ。
千種顔ふ待仕く。方僅や遅しと刷ふ程なく。織田の先陣次第
そうち。陸々ふ隊伍とて羊腸なる徑ふも。一勢くく推ふ。

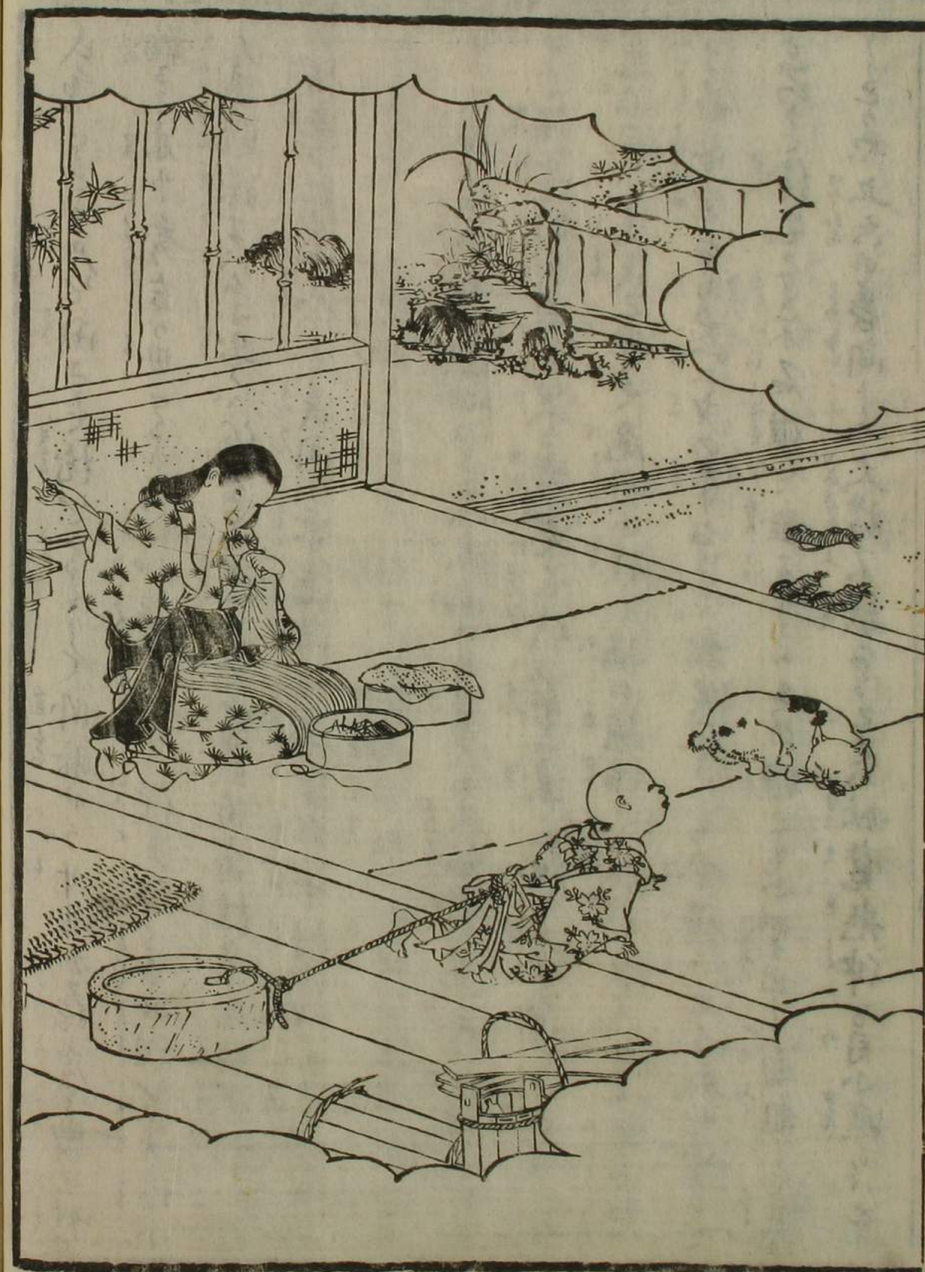
行陣と呑で待ち。是順位房ふ。後藤ふて二統九こ内ふ。
遠方は同當鉄信長ふこそと。強ひと極腰腰のあふ撃拔んと。火蓋と
裁て燈と發つふ。信長運や強うう。強ひ惑て。細腹の紐と搖りて
身ふ當らぬ。順位房大ふ熱腸。二遣統と。鞭續て撃ぬ。九八外れ
う。織田勢大ふ驚ひ。騒ぎ。いで曲者と。捕へんと。いふと。信長國く。割一
人ハ。夫ふ。あるうくと。棄置と。宣ひて。肩とも。ぶさと。ぶく。馬と。進ま
せ。多ひ。號ふ。岸上。とうち。越く。千種の。星ふ。投ふ。へ。て。得ふ。猛き。順位
房も。此態と。見て。右と。振ひ。潜線。して。逃遁。ふと。遠。后。踏頭ふ。一敵の。妨
あくで。事。故。ふく。信長。緒。將。と。呼。偶。玉ひ。波。臭。塠ふ。入。せ。れ。ば。清。井
も。犯。と。ふ。御。ふく。徒。ふ。緒。居。と。過。ふ。ふ。ふ。

加藤福鳴庁桐動勇長演屬之士出陣

力を以て人を服する者は心服するにあらざるべし。徳をもて人を服するは中心悦ぶ。濃州斎藤義龍秀吉は紀州長濱の城主にして領分の百姓町人を帰服せしむるは仁義を欠ては一事もなさざる賞罰の令を正しふし。猶著をもて偽作をなし。廉直をもて当をしられば。衆民ひとしく義想して乳児の慈母を慕ふが像しこれは依て戦国なれば長濱たるべし静謐にして民を仕業を励むこと脩斉家を本とす。教慈の道を缺ざるべし自然と豊饒安楽なる慨に入る秀吉まもなく心を用ひ。素地安穏なるしめんと故国の間者を探る或は残賊潜瀬子の潜穴を穿んとす。加藤虎之助福島市松片桐助作之人を鋭卒首とす。玉ひ郷里邸巷を巡検せしめ政事農重なるべし長濱は領分安穏にして。所不平の所なく。衆民

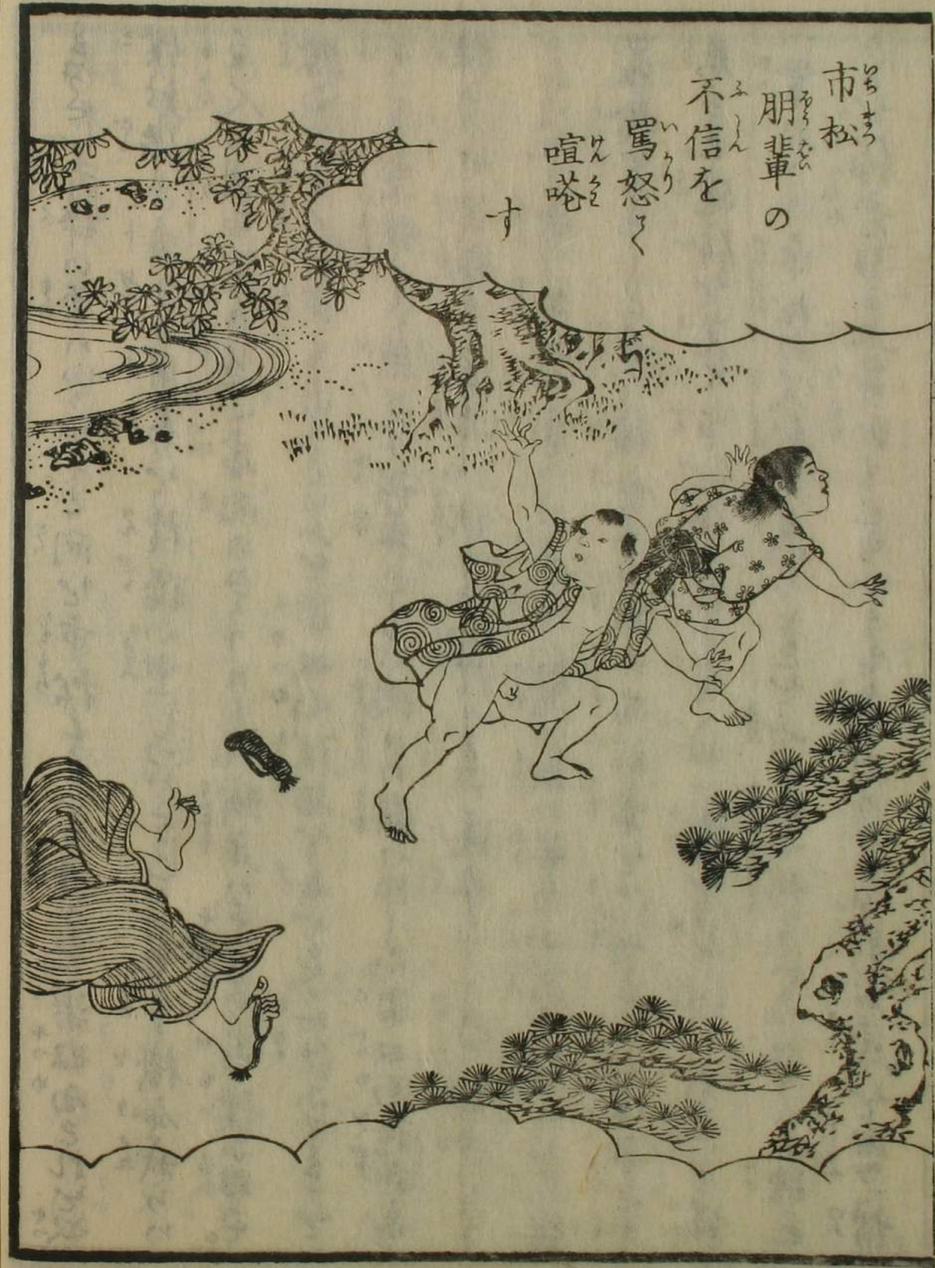
民家さまざま戸を閉さず。枕を高くふして眠せり。中も加藤虎之助の出世を賞る。木下秀吉が母なるは加藤が父と従者なり。其恩を穿猶小。大識冠孫兵衛公小出吉政の苗裔なる大臣魚名公の苗裔なる守府将軍利仁卿の後胤なれども久しく民間小零落尾刑部中村小位しき家祖師と業こせしに。五郎助が一子なり。備前福島市松は加藤虎之助の後妻小一と母は五郎助が叔母なるも。太閤の母堂とも又縁者なり。父は中村小兵位せる桶屋新右衛門と云る者也。之代以前は東こ何の仕事なりしが戦国の習見非なるも。士民こなりて尾刑小位。桶の箍結く活計とせり。中も遠市松が生長尋常なりしが。揺籠小さへも安得ずして。腰を索りて持つと縛て。こを小石雉を拵ゑ。その雉とも小撃已。匍匐して遊びしとや。五六の長間より。大膳不歇ることは妖魔鬼神も目小遮らば

福島
市松
幼雅
怪力
大福帳



ひしゝんだ極窶あり。年七歳ゝも成つるとバ親の膝下ゝ置もいうゞと因藏
ゝ〻る埔屋と頼。ゝ〻ゝ公なさをゝ〻ゝ〻ゝ。年ゝ比ゞゝ大枝ゝ。財たく
力も十倍の強勇あり。ゝゝまゝゝゝゝて主人も殊ゝ寵愛ゝ。一年たゝうゞ
過しゝる。願年の変ゝ。十八たゝうの明年あゝて非道の剣を鍛冶
ゝて性質強意の市松ゝれバ。遂ゝ彼者と宣導と做発。陽ゝある強
と延百十六ゝゝる小童の肩へ舎報もゝさゞ投つけし双尖割咤とゝ
しゝゞ。二寸ゞゝの疵つけて。血の流ゝ出ゝと叫疵。彼ゝの大ゝ驚怖
他殺ゝと叫ぶと聞。市松ゝ速く走り倚ゝゝさゝ拳振り因眉間の
あゝゝと連撻ゝ六七ゝど歩ゝる面へ家中の輩仰走り来り驚きゝ
怒罵ゝ。市松と幸く撃去。負瘢と仍抱てよゝく見ゝゝ肩ゝ人のゝど
傷きて殊ゝ若しゝ体ゝしゝゞ。ゝ児の事ゝゝのひ驚ゝ。等閑ゝも涙さ

ゝゞし打辞の原ハいゝゝゝと問ゝ市松ゝゝゝも噪ゞゞ。渠奴面ゝれゝ奴
僕計傷く。自分の用事ゝ擅驕ゝ。東しつけゝゝしゝゞゝゝ機会我ゝハ
主人の用ゝて。ゝ足ゝ虚間のゝゝゝゝバ。我分ハゝ方の家僕ゝ非ゞ。
殊ゝハ主人の用もゝゝゝゝゝ渠奴面猩犯ゝ無ゝゞ。ゝゝ法ゝゝゝゝ
打ゝる面へ我ゝゝ魚刀ゝ投居ゝゝバ。微口の疵つけゝゝ。渠奴面隠病未
練ゝゝ。他殺ゝと泣叫び狂ゝる面惰ゝゝバ。遠拳ゝく五六撻ゝゝゝ
ゝゝでゝゝと嘲ゝ笑ふゝ家内の輩。或ハ驚況或ハ呆ゝ。ゝ児ゝ似合ぬ大儀
ゝゝ捨置ゝゝと噪ぐ機舎ゝゝ。鐵因徹邪常ゝ犯明ゝる巡倹奉行出
来ゝゝ。遠体ゝゝて市松ゝらびゝ負瘢の者ゝ召ゝて奉行の場
へ撃れゝゝ。市松の父彰右衛門ハゝゝゝゝゝゝ聞て大ゝ悔きゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。縁者ゝゝ五郎助もゝゝゝゝ集ゝゝゝゝゝ彰右衛門ゝゝ慰ゝ謂


市松
朋輩の
不信を
罵怒く
喧嘩
す

やう市松が母ゟ。木下殿の母公と親しく縁者なればこゝを小方便て料理きよと教指を听て大小歓び五郎助と同道して。木下が母の許小至り。彩る始末を歎きくるゝ。木下が母こゝを受諾。孫助をもつて使とし。文章細くと書記得。測役城へ遣しくゝまを秀吉ゟ賢へせられ。孫助小稟属らるゝ。政事の道ハ親疎をいとゞ。俗情ある沙汰を為ざるをもて。全くとなる小ハゝらゞやゝ。然ゞ木下が内縁ありとて。非を理ふせんとおもゝ。條次の外計事小なん。いろ〳〵母公の賴をゆゝ。勝づ死新詔を負さるべんやとして木下藤吉郎ハ町奉行なゝざれば。猶更這事料理ゞし。且市松が一条ハ切棄ゞる事小も叶ゝゞよも一命小拾るまじ。市松ゞ八歳なまゝいろ〳〵も幼稚の事なりゝ。賠對人の死くるゝらねバ。格別の事ハよもあるまじ。ゝし〳〵事漸なバ市松を他家へ出さゞ大切小養育せよと新右衛門小きつ〳〵所よ。且又母公ゆハ此后ゝも這般の事を執揚て命弑せゝゝふゝと。富ゝとゝに属て中村彌助を帰ゝくるべ孫助直地小走庭ゝ。新と謀ゞゝ果て木下が中せゝ如く。事穏便小ゝゝふけゝ。ゝ后木下測役へ親疎単を招きくる時。新右衛門が父ゝも味ゝ。細く市松を殺らまくるゝ。いゝゝ元人ゝゝゝ相貌こゝゝ成長ゝゝゝゝ。一臂をらんと心小歓び旋て作中が辞小憑倚て。軍法兵術を学ゝせける。備ゝゝ行桐助沢ハゝ和源氏信濃の國住人ゝゝ。父の伝の業濃別小業を。玉法左家ゝ大相変小伝ふ熟るゝ賴義秋義道こゝ小謀ゝゝて。英流を出奔ゝゝくる后行桐業も寡人ゝ。助作幼ゝて父小ゝくゝ母の慈育を蒙て。山郷小暫居ゝくるが木下測役小住しゝとゝ。を躁を巡見る昫不圖這母子の清潔

を見識身上の子細を鞫問厳く扶助を加へらるゝ洲股の媒へ招寄。是も同じく仆中小あづけて軍法を学ばせらる。重治之個を信厚。志を深切小教授しけるが心中猛くして器量も甚小丸み らざる。先日越前殿の時も這候の之個今外小擢きさうしも重治 言ふより士を教る法妙を得らしめへ小ゆん。未頼母しき者ありて木下 小勧めて元服させ。加藤虎之助清正福島市松正則庁柄助作見元と号ら せらる。這者幸ひ初ゆゑれど。枝言くして力もたぐまして武術小長さま べ普請仕の巡検使さる。元氏の苦痛を湯らせ。非常の事を制せられる

繪本豊臣勲功記三編巻之六、終